

ご挨拶

くまもと技術革新・融合研究会 会長
熊本大学 教授

末吉 敏則



くまもと技術革新・融合研究会 (Research for Innovation and Synthesis of Technology in Kumamoto:略称RIST)は、平成元年10月に熊本知能システム技術研究会として産学官連携に基づいて地域企業の技術の向上及び新しいシステム技術の開発を目的に設立され、創立30周年を迎えました。そこで、創立30周年事業として記念シンポジウムを開催するとともに、会員各位ならびに関係者のご努力とRISTにおける活動の実績や思いを述べていただくとともに、これからのRISTにおける更なる活動への思いを期して30周年記念誌を刊行することに致しました。

この30年間を顧みますと、半導体製造業企業の進出で、熊本は農業県から工業技術県へと大きな変革を歩き始めました。そのような背景の下、実効的な産学官推進組織を目指してRISTが発足しています。最近では製品出荷額が熊本県内1位、九州内でも3位となるまで成長した進出企業もあり、半導体製造装置やフラットパネルディスプレイ製造装置を製造する企業やそれらの関連企業なども熊本県に集積しました。

その一方で、社会ならびに経済環境はめまぐるしく変化し、これまでの縦割りの「ものづくり技術」では限界が見えており、数年前から医工連携や農工連携、さらには六次産業化を含めた農商工連携を見据えて活動を広げています。また、平成28年4月に甚大な被害を及ぼした熊本地震後は、来るべき想定外の災害に備えることは熊本地震を経験した私たちの責務と捉え、防災・減災ならびに創造的復興に向けたRIST活動も行っています。

創立から30年経た現在、製造業では鉄鋼や機械、自動車などの製造工程をセンサーや通信で

デジタル化し、横断的につなぐことで生産性を高めようとする動きが世界の潮流になっています。代表的なドイツの戦略では、製造業は機械化、電氣化、コンピュータ化という3段階を経てきており、さらにIoT (Internet of Things)やAI (Artificial Intelligence)が加わることから「インダストリー4.0」と命名しています。この「インダストリー4.0」は、ドイツ流製造業を世界標準にするという「スマートファクトリー」というコンセプトが背景にあります。もう一つの牽引役である、米国の「インダストリアル・インターネット」は製造業だけをメインにするのではなく、エネルギー、ヘルスケア、製造業、公共、運輸の5つの領域を対象とし、IoTよりもCPS (Cyber Physical System)という言葉が使われています。

一方、人類の歴史を振り返ると、「狩猟社会」(1.0)に始まり、「農耕社会」(2.0)を経て、産業革命による「工業社会」(3.0)が実現しました。いま我々はコンピュータが普及した「情報社会」(4.0)に生きており、次が内閣府による「第5期科学技術基本計画」に謳われた「超スマート社会」(Society5.0)となります。日本が唱えるSociety5.0では、ドイツのインダストリー4.0と米国の「インダストリアル・インターネット」を併せたCPS/IoTをキーワードとして、さらに広く社会全体への波及を目指しています。

今後は幅広い人材がIoTやAIの基礎知識を持っていなければ、競争力ある製品の開発や事業展開は難しくなります。ビッグデータやロボットなど先端技術の急速な発達で、AI人材やデータサイエンティストの不足が深刻化しています。地域企業の人材育成と発展に多少なりとも貢献できればと思っておりますので、県内各界からのますますのご支援とご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。